

平成 27 年度日本海ソデイカ(あかいカ)長期漁況予報

但馬地域の沿岸漁業にとって重要な対象種となっている「ソデイカ(あかいカ)」について、長期漁況予報を発表します。今後の漁業操業の参考になれば幸いです。

見通し(予報対象期間:平成 27 年 9 月~11 月)

【来遊資源量】

- ・1日1隻あたりの漁獲量(9~11月平均)は、120 kg 前後の見込み。
- ・昨年(1日1隻あたりの漁獲量;113 kg)とほぼ同程度の漁獲となる見込み。
- ・過去 10 年平均(2005~2014 年;135 kg)をやや下回る。

【漁場】

- ・山陰・若狭沖冷水域の張り出しは平年並み、対馬暖流域の 50m 深水温も平年並みで推移し、漁場形成も平年並みで推移する見込み。

* 予測に使用した海洋観測資料は、「佐賀県玄海水産振興センター」、「第七管区海上保安本部海洋情報部」、「国立研究開発法人水産総合研究センター日本海区水産研究所」からご提供いただきました。また、海況予測には、「国立研究開発法人水産総合研究センター日本海区水産研究所」の日本海海況予測システム(JADE)を利用しました。記してお礼申し上げます。

1. 資源状態

兵庫県におけるソデイカ(あかいカ)の漁獲量は近年比較的高い水準にあり、年間の漁獲量が1,000 トンを上回ることもあります。来遊資源量のひとつの目安となる漁獲量の変動は日本海の各府県間で非常に似通っており、本県の漁獲量が多いときは他府県の漁獲量も多く、本県が少ないときは他府県でも少なくなる傾向があります。日本海のソデイカ(あかいカ)資源は大きくひとつとして捉えることができるようです。

2. 日本海区水産研究所発表の海況(水温や冷水域の配置)予報(2015 年 7~9 月)

- ①山陰・若狭沖の冷水域の張り出しは、平年並みで経過する。
- ②対馬暖流域の表面水温はやや高め、50m 深の水温は平年並みで推移する。

3. 漁況予報(見通し)の説明

日本海で漁獲されるソデイカ(あかいカ)は、2~3月を盛期とする1~9月頃に発生し、対馬暖流の上流部から来遊してくる資源と考えられています。例年、6月末頃には胴の長さが15cm以下の「稚イカ」が但馬地域の定置網等で混獲されることから、日本海への来遊はこの時期に始まっていると思われます。

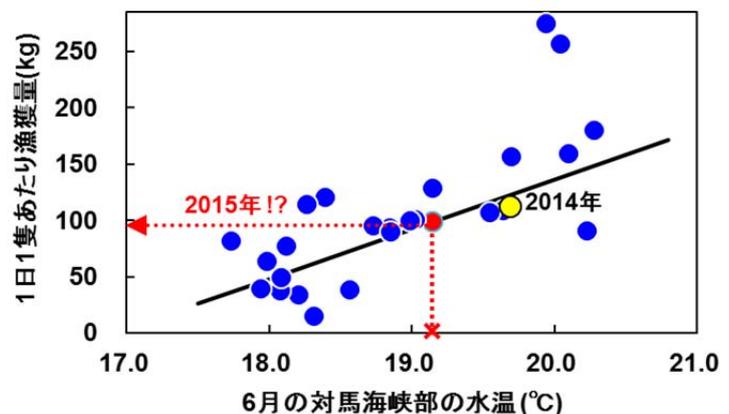


図1: 6月の水温と漁期中の資源水準との関係

これまでの調査結果により、来遊時期と考えられる「6月」の対馬暖流の環境条件（水温、塩分、潮位等）とその年の9～11月の資源水準（1日1隻あたり漁獲量）との間には、非常に密接な関係があることがわかっています。図1は、その一例を表したものです。横軸が対馬海峡部の6月初旬の水温（水深10～20m層の平均水温）、縦軸がその年の兵庫県沖の9～11月の資源水準（1日1隻あたり漁獲量）を示しています。これからわかるとおり、6月の水温が高い年は資源水準も高く、逆に水温が低い年は資源水準も低くなっています。また、同じ時期の底層塩分や、対馬（厳原）の潮位（6月の平均潮位）などが関係していることもわかっています。そこで、これらの環境条件をもとに、複数の予測モデルを作成し、来遊資源水準を推定したところ、図2のような結果となりました。

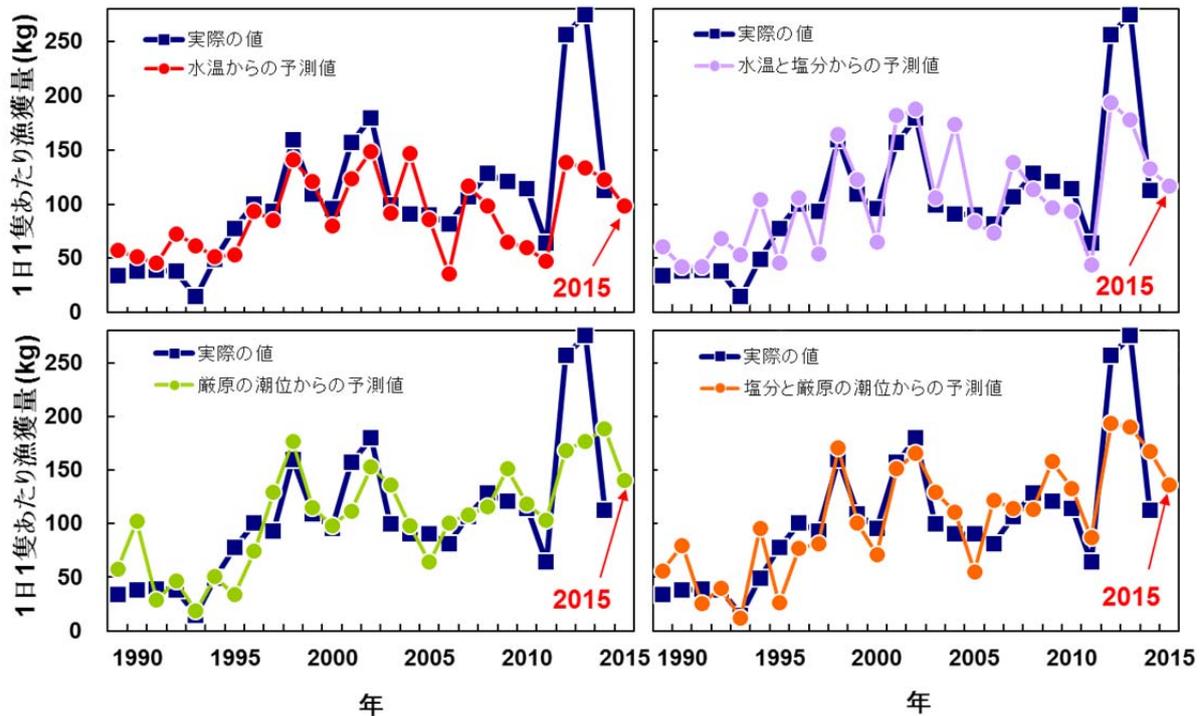


図2：6月の環境条件から予測した9～11月の来遊資源水準

推定された今年の来遊資源水準は、「1日1隻あたり120kg」となり、昨年（113kg）の実績値と「ほぼ同程度」、過去10年平均（2005～2014年；135kg）と比較して「やや少なめ」の予測値となりました。

4. その他

例年、6～7月頃より但馬地域の定置網などで小型のソデイカ（あかいカ）の混獲が始まり、この時期に混獲が多い年はその年のソデイカ漁が好漁となる傾向が見られます。これらの情報は、今後、定量化を通じて予測精度の向上に役立つ可能性があります。関連する情報がありましたら、但馬水産技術センターまでお知らせください。

また、漁期開始後の漁場形成は、漁場周辺の水温や冷水域の動向などにも大きく影響を受けることが明らかになっています。当センターでは、ホームページに「海の天気図」として翌週の但馬沖海域の海況予測図を掲載していますので、併せてご参照ください。

(<http://www.hyogo-suigi.jp/tajima/tenkizu/menu.htm>)

次回は、漁期中の10月中旬頃に「中短期漁況予報」を発表する予定です。